

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

# モンゴル帝国時代の仏教とキリスト教 カラコルムの宗教弁論大会を中心として

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | バイカル  |
| 雑誌名 | 国際哲学研究  |
| 号   | 別冊6   |
| ページ | 22-28   |
| 発行年 | 2015-03-10  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00008135/">http://id.nii.ac.jp/1060/00008135/</a> |

# モンゴル帝国時代の仏教とキリスト教

## ーカラコルムの宗教弁論大会を中心としてー

バイカル

### 一、モンゴル帝国の宗教政策とカラコルムの宗教事情

13世紀初頭、チンギス・ハーンがモンゴル高原を統一し、「モンゴル・ウルス」という国家を打ち立てた時、その国民の半数以上は、ネストリウス派キリスト教徒であったと推測される。それ以外に仏教徒、ムスリム、道教及び儒教の信者もいた。特に、モンゴル帝国のハーンの側近に、様々な信仰をもつ異邦人が数多く集い、宮廷では、シャーマン、キリスト教徒、仏教徒、ムスリムが重要な役割を果たした。

このことから、フフ・テンゲル（蒼き天、シャーマニズム）を信仰するチンギス・ハーンとその後継者たちは、宗教に対して寛容な政策をとり、信仰の自由と平等を保障していたことがわかる。

1220年、チンギス・ハーンは、カラコルムの地で都を建設しはじめ、1235年オゴタイ・ハーンにより宮殿が完成された。1247年グユク・ハーンの時代、カラコルムでは中国禪宗寺院である太平興国寺が既に建てられていた。1253年末、モンケ・ハーンが、少林寺長老福裕を、首都カラコルムにおけるキタイ、チベット、タングート、ウイグルなどの国や地域から来た仏教徒を管理する「都僧省」（職名）に任命した。福裕は「キタイ僧侶」ではないかと考えられる。キタイ僧侶は、後の1255年と1258年に行われた「仏教と道教の論争」に、仏教側の代表として参加した人物である。

1254年頃、カラコルムには、「いろいろ異なった民族に属する異教の寺院十二、モスク二つ、教会一つ」<sup>1</sup>があったと、フランス国王ルイ9世の使節として、遙々モンゴルに来た修道士ウィリアム・ルブルック<sup>2</sup>が、ルイ9世への報告書に記録している。

### 二、ウィリアム・ルブルックの記録したモンゴルの仏教事情

ウィリアム・ルブルックは、カラコルムに滞在中仏教寺院に行き、仏教徒と積極的に交流しようと努めていた。彼の報告書に、仏教徒と寺院及び仏教徒の信仰について、以下のように書いている。

### 1、仏教徒について

「異教徒の司祭たちは誰でも、頭髪とあごひげとをすっかり剃り落し、・・・サフラン色の僧衣をまとして貞潔をまもり、百人か二百人かがいっしょに、一つの共同生活をしています。・・・(僧侶たち)、聖歌隊がむかいあつてうたうように、たがいにむかいあつてすわり、両手に経典を持ち、ときどきそれを台の上におきます。寺院にいるあいだじゅう、頭には何もかぶらず、黙読して沈黙をまもります。・・・(僧侶たち)、何処へ行くさいでも、丁度わたしどもがロザリオをたずさえるように、ひもに株を 100 か 200 とおしたものを手にし、しょっちゅう、「オン・マン・バッカム」、・・・つまり、「おお神よ、なんじ知れたもう」という言葉をとなえます。こういつて神を念ずる回数が多ければ多いほど、神の功德が多くうけられると信じているのです。・・・〔僧侶が死ぬとその〕死体は、むかしからのしきたりに従って焼き、その灰を一尖塔のてっぺんにおさめます」<sup>3</sup>。

### 2、仏教寺院について

「異教寺院のまわりの境内は、美しい内庭になっていて壁ですっかりかこまれ、その南側に大きい門が一つあって、そこに司祭たちがすわってしゃべりあいます。その門の上部には、できれば町全体を見おろしてそびえ立つような長い棒が一本立てられます。この棒によって、その建物が異教寺院であることが知れるのです。いまのべましたのは、あらゆる偶像礼拝者のもとで共通に見られる現象です。・・・寺院には、・・・大小さまざま、沢山の偶像」<sup>4</sup>が崇拝されていた。

### 3、仏教徒の信仰について

ウィリアム・ルブルックは神や霊および偶像について仏教徒に尋ねたことがある。その答えを記そう。

「われわれは、ただ御一体の神しかおられないと信ずる。・・・神は一つの霊であると信ずる。・・・神がかつて、人間性を執ったことがあると信じない。・・・われわれはこれらの像を、神にかたどってこしらえるのではない。われわれのうち誰か裕福なものが死ぬと、その息子が妻、または誰かそれに親しいものがその死者の像をつくらせて、ここに安置し、われわれがそれを、死者の追憶のために崇敬するのだ。・・・(人間をうれしがらせるためではなく)、人々の追憶のためにするのだ。・・・(靈魂は)、われわれのからだのなかにある」<sup>5</sup>と明言していた。

## 三、モンケ・ハーンと彼の宗教認識

ウィリアム・ルブルック修道士はモンゴルに滞在中、モンケ・ハーンに数回謁見していた。帰国を前にした最後の謁見では以下のような会話をしたという記述がある。

モンケ・ハーン：われわれモンゴル人は、それによってわれわれが生き、それによって

## シンポジウム「宗教間の共生は可能か」

われわれが死ぬ、唯一の神しかましまさぬことを信じ、われわれはその神に、正しい心をもって向かう。

ウィリアム・ルブルック修道士：神ご自身、これをききとどけたもうでしょう。それは、神のたまものによるのでなければ、おこりえねことでございますから。

モンケ・ハーン：しかし、神は手にいろいろ異なった指を授けたもうたように、人々に、いろいろ異なったみちを与えたもうた。汝たちには、神は聖書を授けたもうた。それなのに、汝たちキリスト信者はそれを守らない。聖書には、人は他人を非難すべし、などとは書いていないはずだ。それとも汝らは、書いてあるとでも言うのか？

ウィリアム・ルブルック修道士：書いてありません。しかし、わたしははじめから、誰と口論する気はさらにないと、はっきり言っておいたはずでございます。

モンケ・ハーン：余の言葉は、汝にはあてはまらね。つぎに同じくまた、[聖書には、]人の金銭のために正義の道からはずれるべし、などとも書いていないはずだ。

ウィリアム・ルブルック修道士：いいえ、陛下。本当のところ、わたしは金銭を得ようとしてこの地方へ参ったではありません。いやそれどころか、私は、自分に差し出されたものをことわりました。

モンケ・ハーン：いまの余の言葉は、汝にはあてはまらね。余が言っていたように、神は汝たちに聖書を授けたもう。なのに汝たちはそれを守らない。これにたいしてわれわれには、神は占者たちを与えたもうた。われわれは、この占者たちの告げるままに行動し、安穩にくらしている<sup>6</sup>。

この会話から分かるように、モンケ・ハーンは各宗教を五本の指に喩えた上で、自分の宗教信仰を明言していた。同時に、キリスト教徒の「排他的」な考えと自己利益を求める姿勢を取り上げて批判していたことがわかる。

モンケ・ハーンはシャーマニズムを信仰していたが、母親であるソルコクタニ・ベキ<sup>7</sup>の影響でキリスト教に関する教養（認識）はあった。同時に各宗教に対する関心もあったと考えられる。

チベット語史書『Deb ther dmar po』などには、モンケ・ハーンは元々外道（ネストリウス派キリスト教）を信仰していたが、カルマ師の説法と法要により、仏教に改宗したと書かれている。

モンケ・ハーンは、「ここには・・・キリスト信者・イスラム信者・テュイン（僧侶）どもがいるが、誰もがみな、自分たちの奉ずるおきてが一番すぐれ、自分たちの文献つまり聖典が一番真実だ、と言ってはばかりない。・・・一堂に集めて議論させ、各自自分のいうことを書きとどめさせ、真実を知りたい」<sup>8</sup>と命じた。そのため、宗教弁論大会が開催されるようにな

った。

#### 四、有史以来の世界宗教弁論大会

1254年5月30日に、モンゴル帝国の都であるカラコルムのネストリウス派キリスト教礼拝堂において、キリスト教徒、イスラム教徒と仏教徒による弁論大会が開かれた。審判役にモンケ・ハーンの3人の書記がつとめ、3人はそれぞれキリスト教徒、イスラム教徒、仏教徒であった。大会は、「誰も相手と口論したり、相手を侮辱したりしてはならぬ。また、誰もこの討議を妨げる如き騒ぎをおこしてはならぬ。これらにそむけば死刑である」<sup>9</sup>というモンケ・ハーンの厳しい命令のもとで行われた。そのため、弁論者たちは、まず相手を「友よ」と呼んでから課題に入った。

キタイ人の僧侶が、「世界はどのようにして創られたという問題か、それとも、死後に靈魂はどうなるかということか」と、ウィリアム・ルブルック修道士を中心とするキリスト教側に聞いたところ、ウィリアム・ルブルック修道士は「それはわれわれの論争の一番はじめに持ち出すべきことではない。万物は神に由来し、神は万物の根元であり源泉である。だから、われわれはまず、神について話すべきだ。お前たちは神に関して、われわれとは異った信仰をいっているが、マング（モンケ・ハーン）は、どちらの信仰が一番優れているか、知りたがっておられるのだ」<sup>10</sup>と応じた。すると、審判役たちが賛成したため、「神」について、主に一神教と多神教について論じあった。

以下はその内容である。

キリスト教側：「神は存在し、しかも、唯一の神しかましまさず、さらに神は完全なただ一つの御本性をそなえた御者である。このことをわれわれは心に堅く信じ、この口で公言する。お前たちは何を信ずるものか？」

仏教側：「愚者どもは唯一の神しか存在せぬと言うが、賢者たちは多くの神がましますと言う。お前らの土地には、強大な君主たちがいるではないか？そしてその最高の君主が、このマング＝カン（モンケ・ハーン）ではないか？神々についても同じことで、異なった地域にそれぞれ異なった神が存在するのだ」

キリスト教側：「それは悪い例証、つまり、お前が人間界のことから神を論じて言っている比喻にすぎない。その論法でゆくと、有力なものは誰でも、自分の領土内では神と呼ばれうる。ということになるからな。」

仏教側：「お前たちが唯一の存在であるという、お前たちのその神とは、一体、どんなものののだ？」

キリスト教側：「そのほかに神なきわれわれの神は全能でましまし、したがって、いか

## シンポジウム「宗教間の共生は可能か」

なるものの助けをも必要としたまわぬ。いなかえって、われわれ誰でも、神の御助けを要するのだ。人間の場合はこれとはちがう。あらゆることをなす人間は誰ひとりいない。だから、地上には多くの君主がいなければならぬだ。人間は単独では何もかも背負いきれぬのだからこれは当然だ。また神は全知でまし、したがって、一人の相談役をも必要としたまわぬ。いなかえって、すべての智慧は神から発するのだ。その上さらに、神にまざって善なるものはなく、神はわれわれの善行を必要としたまぬ。われわれは神のうちに生き、動き、存在しているのだ。われわれの神とはこういう御者である。だから、これ以外のものは考えてはならぬのだ。」

仏教側：「そうではない。それとはちがって、天上には、その根源についてわれわれのまだ知らない最高神が一つ存在し、その下には一〇、さらにその下には一つ、下位には一つ、下位の神が存在する。そして、地上には数かぎりない神が存在するのだ。・・・お前たちの神が、お前のいう通りのものならば、神は何故、天地万物の半分を悪につくったのだ？」

キリスト教側：「そんなことは嘘っぱちだ。悪をつくったのは神ではない。存在するのはすべて良いものなのだ」

仏教側：「もしそうなら、悪は何処から生まれるのだ？」

キリスト教側：「その問いは正しくない。悪が何処から生まれるかどうかをきく前にまず、悪とは何ぞや、をたずねるべきだ。しかし、はじめの質問にかえり、お前たちはどんな神でも全能と信じているのかどうか、これに返答してくれ。そのあとでわたしは、お前のだしたいと思う問いにのこさず答えよう」

仏教側：「どの神も全能ではない」

キリスト教側：「それならば、お前たちがどんな危険に遭遇しても、お前たちの神はどの神も、お前たちを助けられぬというわけだ。神の手に負えぬ災難がおこらぬでもないからな。それだけでない。「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない」。ならば、お前たちは、天上と地上とに存在するそんなに沢山の神々に、どうすれば仕えられるというのだ？」

仏教側：沈黙<sup>11</sup>。

弁論大会には、各宗教の「一番賢いもの」以外に大勢の人々が出席し、最後の自由議論となり、「ネストリウス派キリスト教徒とイスラム教徒とはともに、大声でうたいました。それから、ひとりも残らず、心ゆくまで飲み」<sup>12</sup>、解散した。

世界の三大宗教の信徒、またカトリック教に異端とされていたネストリウス派キリスト教徒が、このような平和な環境の中、平等な立場で弁論できたことは有史以来、はじめての出来事

## モンゴル帝国時代の仏教とキリスト教—カラコルムの宗教弁論大会を中心として—

だと言っても過言ではない。これはモンゴル遊牧文化を継承した帝国のハーンたちの寛容性と調和性がもたらしたものであると考えられる。

(モンゴルのキリスト教に関しては、拙論「モンゴルのオルドス地域におけるキリスト教の過去と現在—ウーシン旗の「エルケウン」について」、桜美林大学『人文研究』第4号、2013年3月。「モンゴル帝国の寛容性」植民地文化学会『植民地文化研究』12、2013、などを参照されたい)

### 参考文献

- 護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記——遊牧民族の実情の記録』、光風社出版、1989年  
耿昇 何高濟訳『ルブルックの東方旅行記』(中国語)、中華書局、1985年  
江上波夫『モンゴル帝国とキリスト教』、サンパオロ、2000年  
佐口透『モンゴル帝国と西洋』、平凡社、1970年  
C.M.ドーソン著、佐口透訳注『モンゴル帝国史』5巻、東洋文庫、平凡社、1976年  
杉山正明『モンゴル帝国と大元ウルス』、京都大学学術出版会、2004年  
ガブリエル・ローナイ著、榊優子訳『モンゴル軍のイギリス人使節〜キリスト教世界を売った男』角川選書、1995年  
那谷敏朗『十三世紀に西方見聞録』、新潮社、1993年  
窪徳忠『モンゴル朝の道教と仏教—二教の論争を中心に—』、平河出版社、1992年  
[明]宋濂等撰『元史』、中華書局、1976年  
[波斯]拉施特主編、余大鈞、周建奇訳『史集』、商務印書館、1983年  
[伊郎]志費尼著、何高濟訳『世界征服者史』、商務印書館、1980年  
[亜美尼阿]乞刺可思・剛札克賽著、何高濟訳『海屯日記』、中華書局、1981年  
[法]伯希和著、馮承鈞訳『蒙古於教廷』、北京中華書局、1994年

---

<sup>1</sup> 護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記——遊牧民族の実情の記録』、光風社出版、1989年、p.259.

<sup>2</sup> ウィリアム・ルブルック (Guillaume de Rubrouck, 約1215~1270)、フランスのフランドル地方出身のフランシスコ会修道士。ルイ9世のサルタクアテ親書を帯びて1253年にアークルを出発した。12月モンゴル帝国の都であるカラコルムから南約300km離れてオンギンゴル (Onggi-yin goul) につき、翌年の1月そこでモンケ・ハーンに謁見した。4月カラコルムにつき、7月帰国の旅にでて、1255年トリポリに着いた。1256年『東方諸国旅行記』という報告書を書いた。

<sup>3</sup> 前掲書、pp.200-201.

<sup>4</sup> 前掲書、p.201.

<sup>5</sup> 前掲書、pp.202-203.

## シンポジウム「宗教間の共生は可能か」

---

<sup>6</sup> 前掲書、pp.275-276.

<sup>7</sup> ソルコクタニ・ベキは、ネストリウス派キリスト教を信仰するケレイト部族の王であったオン・ハンの実弟ジャガ・ガンボの第3女である。12世紀から、西洋の伝説で東方のキリスト教国の君主プレスター・ジョンと知られたのは、ケレイト部族の王である。ソルコクタニ・ベキは誠実なキリスト教徒であり、モンゴル帝国と西洋のキリスト教世界との交流に多大な影響を与えたとされている。元朝の創始者フビライ・ハーンはソルコクタニ・ベキの次男であり、中央アジアでイル・ハン国の創始者フレグは三男である。

<sup>8</sup> 護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記——遊牧民族の実情の記録』、光風社出版、1989年、p.267.

<sup>9</sup> 前掲書、p.270.

<sup>10</sup> 前掲書、p.271.

<sup>11</sup> 前掲書、pp.272-274.

<sup>12</sup> 前掲書、p.274.